

——近藤貞次氏追悼記——

近藤貞次先生のご逝去を悼む

鈴木 達也

本学会名誉会員近藤貞次先生は昭和54年1月13日享年74歳で卒然とこの世を去られた。まだお元気な先生であっただけに、先生に教えを受けた者および先生を知っている人々の驚きと哀惜の念は計り知れない。ここに先生のご生涯の活動を偲び、謹んで哀悼の意を表わしたいと思う。

先生は明治37年8月新潟県三条市に生まれ、新潟高等学校から東京帝国大学文学部心理学科に進まれ、昭和4年卒業されて後、同大学院に進み研究生活にはいられてから今日まで約50年の長きにわたって、その生涯を学問研究と教育に捧げてこられたわけである。その間において昭和12年から25年まで、丁度戦中から戦後にかけて10数年間は、大学の研究室を出て行政の場において、その専門的学識をもって司法、厚生、労働各省の技官としてそれぞれの場における指導と研究に従事され多大の貢献をされ、その後新制大学の発足に際し、昭和25年には岡山大学、昭和28年には名古屋大学の招きによって教育学部教授として大学に戻り新設学部の研究室の基礎づくりに尽力され、後進学徒の教育と研究指導に当られるとともに、大学評議員、大学図書館評議員、学部長などの要職を勤め、大学運営にも多大の貢献をされた。昭和53年名古屋大学を停年退官後も愛知学院大学教授として教育と研究指導に当られ、終始学問研究と教育に献身された。

先生の学問的業績としては論文32篇、著書19冊、適性検査の雛案作成などあげられるが、特筆しなければならないのは、1929年の心理学研究(5巻)に発表された「社会心理学における一実験的研究」であろう。それはわが国における社会心理学の研究において実験的研究法を適用した最初の研究であり、当時、社会心理学の研究に実験的研究法を導入することには疑問をもっている人も多かったことを考えれば、正に画期的な研究であったと言える。それに続いて社会心理学の研究法(心研1930)、実験社会心理学(現代心理学2、河出書房1942)などの論文、著書をとおして、わが国の実験社会心理学研究の道を開かれたパイオニアとしての功績は大きく、その後

のわが国の社会心理学の研究の発展に指導的役割を果たされた。

先生の業績のもう一つの側面は、戦中から戦後にかけて職業安定行政の場における活動をとおして職業心理学、職業指導、産業心理学に関心を向けられ、この領域において多くの業績を遺された。戦後の職業安定行政の基礎となった労働省による職務分析の実施やアメリカGATBの雛案による労働省編職業適性検査の作成などもその一つであるが、その他の研究成果は多数の関係諸論文や著書に発表されている。とくにその著書「職業心理学」(1951、1964、雇用問題研究会)はユニークな名著と言われている。

先生は名古屋大学の最終講義で産業心理学における問題点について述べ、社会心理学的認識の不徹底さを指摘され産業心理学の研究に重要な示唆を与えられたが、また、他方、社会心理学の研究目標についても、その著書社会心理学(1955、朝倉書店)のまえがきに、人生における幸福な社会関係、建設的な社会関係、ないし生産的な社会関係の裏付けとなるような社会心理学を求めると述べられ、とかく研究室の中で考えられがちなこの分野の研究に現実の産業社会に役立つ研究を目指して進むべきことを教えられているように思う。社会心理学、産業心理学の広い視野の中で示された先生の示唆は今後の斯学の研究者にとって玩味すべきことばである。

先生のお人柄については、私は学生時代に桑田教授の社会心理学演習の時間に、先生が大学院生として出席され、ときどき講義もしていただいたことを覚えているが、謹厳篤実という言葉がピッタリ当てはまるという印象をもっていた。後に名古屋大学で先生の指導を受けた諸氏も全く同様な印象を受けていたようで、学問研究者の生活および研究態度については、実に地味で厳しい態度を堅持されていたようである。そのような先生の指導のもとで多くの優秀な学徒が輩出しているのは当然であろうが、今日の学会における彼らの活躍ぶりを見て、また、これらの学徒たちの協力によって捧げられた社会心理学概論(監修1968、朝倉書店)、社会心理学(編著1975、朝倉書店)において、先生の「社会心理学」が結実したことを喜んでおられたことと思う。ここに先生の数々のご功績を讃えつつ謹んでご冥福を祈りたいと思う。